

まちづくり 協力に感謝

まち活性化への貢献に町感謝状

令和2年度に3年間の任期を終えた町地域おこし協力隊の卒業式が行われ、町は林啓介さん（観光振興担当）、オルガさん（同）夫妻、手塚日南人さん（森林ガイド担当、この日は欠席）の3人に感謝状を贈りました。同協力隊制度は、地域力の維持や強化を図るために他都市からの希望者を受け入れ、各種活動に従事していただいています。林さん夫妻は民泊や体験ツアー、商品開発、飲食店の事業継承などで活躍。手塚さんはポロトの森キャンプ場でツアー事業を運営しました。林さんは「たくさんの方の支えがあっての3年でした。関東に住む3倍も4倍も早く時間が進んだ感じがするほど充実した日々でした。感謝です」と振り返っていました。同夫妻はこの後も当面は町内に住むことを決めており、これまでの活動を継続、進展させる意気込みを披露していました。（3月31日）



アイヌ口承文学の研究書を寄贈

「白老楽しく・やさしいアイヌ語教室」を主宰する大須賀るえ子さん（80）が、「知里ハツ口述ウエペケレ5話の研究」を刊行、16冊を町内の小中学校・高校や図書館に寄贈を受けました。大須賀さんが教室のメンバー6人と1年をかけ、金成マツさんが知里ハツさんの口述をローマ字筆記体で筆録したウエペケレ（散文説話・昔話）に訳を付けました。大須賀さんらはアイヌ口承文学を研究、翻訳して伝えている。（3月24日）



コロナ対策にマスクケース寄贈

町は白老青年会議所シニアクラブ（佐野尚弘会長）と白老青年会議所（笠井雄太郎理事長）から、新型コロナウイルス感染防止策として町内の飲食店や宿泊施設用に、マスクケース8万枚の寄贈を受けました。ケースはアイヌ文様や町のPRフレーズ入りのおしゃれな柄です。

両者の初の共同事業ということで、「感染防止に活用してください」と話していました。ケースは約150軒に配られました。（3月23日）



教育振興基金に300万円寄付

町は砕石業・産業廃棄物処分業などの株式会社マルトラ（山本浩平代表取締役社長）から、「新型コロナウイルス感染が収束しない中、町内の子どもたちや保護者の大変さを少しでも和らげてほしい」と、同基金に寄付を受けました。山本社長が還暦を迎えたのを機に「少しでもまちのために役立つことを」という気持ちも込めました。（3月31日）



スポーツ・文化・経済振興に300万円寄付

町は生コン製造や販売などの株式会社ケイホク（高山海晋代表取締役）と関連会社ウエスト胆振（小島愛子代表取締役）から、それぞれ200万円、100万円の寄付を受けました。役場を訪れたケイホクの高山長基取締役社長は「白老が発祥の地。創立60周年を迎え、お世話になった白老町に少しでも恩返しを」と話していました。（3月23日）



物品の寄贈で感謝状

町は岩倉建設株式会社（苫小牧市、鈴木泰至代表取締役社長）に、地域貢献に対する感謝状を贈りました。同社は町の申し出に沿い、町立図書館の回転式書架や川沿生活館のストープ、港湾道路の照明を寄贈。既に設置され、町によると利用者の好評の声が寄せられているといます。（3月31日）



遊具寄贈で感謝状

町は盛興建設株式会社（苫小牧市、原広吉代表取締役社長）と丸彦渡辺建設株式会社（札幌市、岡本啓治代表取締役社長）の共同企業体に、感謝状を贈りました。白老小学校のシーソーが老朽化で撤去していたことから、新しいのを寄贈、設置工事を行いました。（4月6日）

